

國學院大學図書館所蔵水野家旧蔵図書の解説と目録

古 山 悟 由

はじめに

『國學院大學八十五年史』によれば、本学図書館には多くの先人による寄贈図書が多数収蔵されている⁽¹⁾。これらの中には左記の様な特色のある文庫がある⁽²⁾。

* 梧陰文庫（子爵井上毅氏旧蔵書 和漢書及び明治憲法・諸法典関係資料類）

* 金田一文庫（元本学教授金田一京助博士旧蔵書 アイヌ関係及び言語学関係書）

* 佐佐木文庫（元皇典講究所所長佐佐木高行氏旧蔵書 和漢書及び文書・記録類及び佐佐木高美氏旧蔵洋書）

* 小柴文庫（元本学教授小柴値一氏旧蔵書 江戸軟文学関係書）

これらのものは独立した文庫として収蔵されているが、多くの寄贈図書は他の一般図書とともに（一部分は貴重図書として）書庫に排架されている状態である。

その中には、元学監杉浦重剛氏の私塾「稱好塾」旧蔵書・元本学教授植木直一郎博士寄贈図書・三好維堅氏旧蔵書・早川千吉

郎氏寄贈図書・院友江口辰太郎氏寄贈図書・院友加藤孝太郎氏寄贈図書などがある⁽³⁾。

今回紹介する子爵水野忠款氏寄贈図書も、また同様な状況にある⁽⁴⁾。なお、紙数の関係上今回は全体の概要と写本類の紹介のみにとどめた。

一 水野家について

水野忠款氏は、「天保の改革」で知られている水野越前守忠邦の四代目にあたる。系図的に示せば左記の通りである。

忠守―忠元―(略)―忠邦―忠精―忠弘―忠美―忠款

当水野家は、譜代大名水野五家のうち水野忠守(三河国刈谷城主水野忠政の四男)を始祖とし、駿河国田中城主・三河国吉田城主・同岡崎城主等を経て、宝暦十二(一七六二)年八代忠任の時に肥前唐津に転封となった。

そののち、十一代忠邦の文化十四(一八一七)年遠江浜松へ、そして弘化二(一八四五)年天保改革の政治責任に対する懲罰的転封により出羽山形に移され、明治維新を迎えた。明治二(一八六九)年十三代忠弘の時、封地奉還。山形藩知事となり、明治三(一八七〇)年、近江朝日山に移された。

十一代忠邦以外にも、八代將軍吉宗の「享保の改革」時の勝手掛老中であつた五代忠之や幕末期の外交掛老中であつた十二代忠精などを輩出している。

忠款氏は、明治四十(一九〇七)年八月二十三日山形県生まれ。昭和七(一九三二)年東京帝国大学理学部植物学科卒業。同二十一(一九四六)年から慶応義塾大学で長らく教鞭を執られ、昭和四十九(一九七四)年五月二十九日逝去された。

氏によって本学図書館が、貴重な蔵書の寄贈を受けたのは、大正十五(一九二六)年であつた⁽⁵⁾。その寄贈経緯等は現在では不明である。

二 水野家旧蔵資（史）料について

水野家の図書収集が何時頃から行われたか判らないものの、忠邦の時代に多く収集されたものと考えられる。忠邦は、政治家であると共に文人としても知られており、特に京都所司代在勤中には、藩儒小田切要助に命じて古文書・記録等の蒐集・筆写を行ったり、京阪の古社寺に散在している名人の筆跡を影写させ『野泉帖』の制作をしている。また、奈良奉行から『東大寺要録』の献納を受けたりしているが、特に明治四十三（一九一〇）年佐佐木信綱博士により水野家の土蔵から発見された国宝「元暦万葉集」は、忠邦が京都時代に購入したと推定されている。またこの時期から国学者村田春門に師事し、封地浜松の国学者高林方朗を招いたりしている。

現在水野家旧蔵の図書・資（史）料類は、本学以外に国立公文書館の内閣文庫、東京都立大学付属図書館（以下「都立大」と略す）に所蔵されている。⁽⁶⁾

内閣文庫所蔵のものは、『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』によれば、「（内閣）文庫に四十八部所蔵する。すべて国書の美本ばかりである。明治十四年ごろ内務省で購入し、当文庫創立当時に同省から移管」されたものである。⁽⁷⁾

一方、都立大所蔵のものは、本学同様水野忠款氏の寄贈によるものである。

『東京都立大学付属図書館所蔵水野家文書目録』の序によれば、「昭和二十七年、本学名誉教授松平齊光氏が付属図書館長であったときに、同氏の友人である水野家当主水野忠款氏の御好意により本館に寄贈」されたものである。

この「水野家文書」はその後北島正元氏等により分析・利用され、天保期～幕末期に至る幕政史料として知られるようになった。⁽⁸⁾ところで、寄贈直後に当時の都立大教授田名網宏氏が、「水野家史料について」（『史学雑誌』第六十編 第三号）という資料紹介をしている。その文中「（前略）記紀万葉以下四十三点に及ぶ古典籍の書名を蓋に記した忠邦座右の書簞笥の内容が、現在全部散逸しているのは注目すべきであろう。」と述べている。

この書簞笥が「忠邦座右の書簞笥」であるかどうか速断できないが、この書簞笥の中身と思われる図書の多くが、本学図書館に現在所蔵されているものである。⁽⁹⁾

三 國學院大学図書館所蔵水野家本の概要

本学所蔵の水野家旧蔵図書類（以下「水野本」と略す）は、本学の図書原簿によれば二百七部、三千百四冊である。

内容的には、室町期から明治期にかけての写本・刊本類で、中身も国史・国文・国学・法制・漢籍等広範囲に亘っている。いまこれを詳しく見れば次のとおりである。

* 写本 三十三部 三百四十冊

* 刊本（和書） 百二十八部 千八十七冊

* 漢籍（和刻本等を含む。） 四十六部 千七百七冊

古写本・古刊本の類は少ないものの、水野家の蔵書印記を有するものや、村田春門・春野等の校合・書入れを有するもの等が見られる。しかし残念ながら現在所在不明のものが若干ある。

四 水野家関係の蔵書印について

蔵書印のうち、水野家関係のものは次の通りである。

* 「引馬文庫」（口絵図一）

十四部

* 「文政辛巳濱松式畏文庫」（口絵図二）

二十七部

* 「三畏齋水野蔵」（口絵図三）

三十一部

* 「貳畏齋水野蔵」(口絵図四)

五部

* 「濱松水野氏之部」(口絵図五)

一部

* 「濱松蔵書」(口絵図六)

二部

現在、『蔵書印提要』等で知られている水野家関係の蔵書印は、「引馬文庫」・「文政辛巳濱松貳畏文庫」印の二顆であった。今回本学の「水野本」の調査により新たに四顆の蔵書印を知ることができた。

「引馬文庫」印は水野忠邦の蔵書印記として広く知られている。「引馬」は忠邦の封地浜松の旧称である。

この印は巻頭・巻末に押されており、また勾玉形の印が共に押され、その中に分類項目が刻されている。

『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』では、「歌集・雑・物語・軍記・教訓・官職・公事・氏族・服飾・雑史・記録・地理・類聚」を記している。「水野本」では、「歌集・歌学・藝術・雑史・類聚・雑」の六種類が見られた。(但し、押されていないものが二点ある。)また「和史(令義解)・和集(群書類従)」(口絵図七)という丸判形の印も見られた。

「文政辛巳濱松貳畏文庫」印は、旧南葵文庫所蔵のものが知られている。⁽¹⁰⁾

「水野本」では、前述のように二十七部にみられ、全て漢籍に押されている。(但し、「江家次第」(写本)にも押されている。)

この印も巻頭・巻末に押されている。(但し、巻末のみに押されたものも見られる。)この印には、「引馬文庫」印における勾玉形の印と同様の役目をする小型方形の印(印文「經」)、丸判形の印(印文「樂」)等が押されている。(但し、全てのものに押されていない。)

「貳畏齋水野蔵」印は、明治期の刊本に押されている。

「三畏齋水野蔵」印の性格については現在よくわからない。

五 「水野本」に見られる蔵書印について

水野家関係以外の蔵書印は次の通りである。(但し、印文の判明しているもののみ。)

- * 「朝田所蔵」(岸本由豆流の蔵書印記)
- * 「朝田弓槻乃印」(同右)
- * 「新宮城書蔵」(単廓)(水野忠央の蔵書印記)
- * 「新宮城書蔵」(双廓)(同右)
- * 「詞華堂」(細井貞雄の蔵書印記)
- * 「紀伊国古学館之印」(紀州藩江戸藩邸国学所の蔵書印記)
- * 「子孫永保雲煙家蔵書記」(安西雲煙の蔵書印記)
- * 「狂歌堂文庫」(北川真顔の蔵書印記)
- * 「鶴」(村田春門の蔵書印記)
- * 「考信閣文庫」(高松藩文庫の蔵書印記)
- * 「橋左蔵」・「平氏文庫」・「石政寿蔵」・「蒙齋」・「菅弓屋蔵書」・「柳文庫」・「曲水園文庫」・「蔵目館」

六 写本目録

目録は書名の五十音順とした。

各書名の後の番号は図書請求番号。

(一) 『浅野家傳記』 III—八五二

内題なし。題簽「浅野家傳記」 二卷一冊(六十三丁)。一面ほぼ十一行書き。二十七・五×十九・五糎。芸州浅野家の家伝史料。

本書の内容は「一 浅野家中興の祖彈正少弼長政ハ尾笏織田信長卿に仕へし又右衛門尉長勝養子本名安井弥兵衛実ハ長勝甥也(中略)秀吉より長政へ采地百二十貫を与ふ。」から始まり、「一(宝暦二年)三月七日老中堀田相模守殿宅ニ家督無相違被下之旨被申儀」まで、日時を追って一ツ書きの形式で書かれている。

(二) 『仇討真書』 一五六—七

内題なし。題簽「仇討真書」 一冊(五十四丁)。一面ほぼ八行書き。二十三・三×十七糎。

奥書「文政八年乙酉年秋七月二日於_ニ雀兒_ノ之艸扉_ニ萬々坊之主寫もの也 正」

本書は小田原藩士浅田鉄蔵の仇討ちに関する一件書類である。

(三) 『伊勢物語和歌抄録』 九一一・一三八—六

内題なし。題簽「伊勢物語」 一冊(三十五丁)。一面和歌三首。十九・四×十三・六糎。

本書は「伊勢物語」中の和歌を抜き出したものであり、後出の(二十一)も同種のものであり、「都立大」の「学芸史料」中に同種のもが見られる。

(四) 『宇津保物語』 九一三・三四—六

内題「宇津保物語」(もしくは「宇都保物語」)。表紙に「うつほ物語」と打付書。(もしくは無し) 全十一冊。一面ほぼ九行

書き。二十六・七×十八・八糎。巻頭に「三畏齋水野藏」の朱印。

本書は早くから学界に知られており、江戸後期の写本で、「俊蔭巻」たつの群鳥」までの十一巻を存す。所謂「清水濱臣本系統」の一本で、『校本うつほ物語』の解説によれば「静嘉堂文庫蔵松井簡治氏旧蔵本（新宮城書蔵本）」と巻名・巻序・本文・頭注・書入など全て同じである。頭注には、諸平・鶴夫・能保・常久等の名がみられる。現在加納諸平の『宇津保物語注釈』の存否が不明なだけに重要な写本と言えよう。⁽¹¹⁾

(五) 『海防臆測』 IV―七九

古賀侘庵著。内題「海防臆測」。表紙に「海防臆測」と打付書。二巻二冊（六十丁）。二十六・五×十七・七糎。嘉永三年版の版本の写し。『日本海防史料叢書五』に翻刻がある。

(六) 『蜻蛉日記』 貴IV―七

内題「蜻蛉日記」。題簽「蜻蛉日記・かげろふの日記・かげろふ乃にき」。三巻三冊。一面十行書き。（最初のみ九行書き。）二七・三×十八・七糎。表紙・巻頭に「新宮城書蔵」（単廓）の朱印。

書入「注異者令賜水戸中納言光圀卿御本」對校而注者 元禄九年四月十一日（上巻巻末朱）。「元禄九年四月十四日以水戸中納言卿御本」一校了 密乗沙門契沖（下巻巻末朱）。「以海北若沖先生本」写元文庚申十一月既望 小野田重好（下巻八十七丁ウラ朱）。「延享甲子五月校之、私考則墨昏 谷川士清」（下巻八十七丁ウラ 墨書）。これによれば、本書は契沖本の転写本に谷川士清が書入をしたものである。なお上村悦子著『蜻蛉日記 校本・書入・諸本の研究』（古典文庫 昭和三十八年刊）によれば、本書は「神宮文庫本の藍筆の書入（谷川士清自註の由）に対しては墨で一々「ア」を書き添えて書き入れてある。故に谷川士清の手校本とは言えない。」としている。

(七) 『源氏物語春門注』 IV—三七四八

内題なし。題簽「源氏物語」(本学受入時に付けた表紙に付されているもの。) 全十四冊。各冊各面共五行書きで、上部三分の一(または二分の一)の部分に注釈がある。全冊約二十四纏前後×十七纏前後。表紙裏に「鶴」の朱印(但し、濡標・蓬生・胡蝶・紅梅・総角を除く)。

本書は、水野忠邦の和歌の師として知られている村田春門の源氏物語の注釈書である。春門は忠邦に「伊勢物語」や「源氏物語」の講義をしており、特に源氏物語の講義は、八年間続き、その日記『樂前日次記』⁽¹²⁾にも「一、源氏物語夢浮橋講畢、京都御勤役中相始、今年迄八ヶ年也、卒功珍重々々、追て竟宴被_レ行べしと御意有_レ之。」(天保五年八月十四日条)とある。またその注釈にも心血を注ぎ、同日記に「一、竹川巻書畢、源氏物語私抄享和二年起筆、漸々この巻また書をへり、今年迄凡三十年におよべり、其中間飛蓬のごとく伊勢・紀伊・浪華とうろたへありき、心落居ず紙筆ともしき事数年をへたり、う治十帖も今はいくほどなく書をへんとおもふぞたのしき。」(天保三年六月二日条)とある。

本学所蔵の分は以下の通りである。(書名のあとのかつこ内は、打付書・丁数)

「濡標・上(冷標)(七十四丁)、蓬生・上(蓬生)(六十五丁)、胡蝶・全(胡蝶)(七十六丁)、柏木・上(閑志判藝)(八十五丁) 柏木・下(柏木)(五十七丁)、鈴虫(須受牟之)(三十四丁)、夕霧・上(夕霧)(七十二丁)、紅梅(紅梅)(四十八丁)、竹川・上(竹川)(五十七丁)、竹川・下(多計河伯)(六十九丁)、総角・三(阿氣麻起)(六十三丁)、宿木・一(桑寄生)(七十三丁)、浮舟・一(浮舟)(六十七丁) 蜻蛉・一(蜻蛉)(六十八丁)」

都立大所蔵の書簞笥の蓋書きに「春門自注源氏物語」とあるものは、この本をさすものと考えられる。なお、内容的には各巻の巻頭に巻名の由来を記し、頭注に源氏の古注や、春門の説等を記している。巻名の由来等は、春門の師である本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』説が中心である。現在、春門の源氏物語に関する注釈は『国書総目録』によれば、東海大学付属中央図書館の「桃園文庫」(故池田亀鑑氏の旧蔵書)所蔵のものが知られているのみである。「桃園文庫」所蔵本は、「桐壺・簀木・空蟬・夕顔・若紫」の全九冊で、各冊共大きき約二十七纏前後、一面七行書き、ほぼ上・下半々に分け、上部に注釈を付している。本書は源

氏注釈史上重要なものとはいえないかもしれないが、江戸時代後期の国学者の源氏物語観を知る一資料であろう。なお書名は都立大所蔵の書簞笥の蓋書きにより仮に付したものである。

(八) 『江家次第』 貴IV—二十二

大江匡房著。内題・題簽とも「江家次第」 全十九冊（巻十六・二十一欠）。二十八・六×二十・四糎。扉に「文政辛巳濱松式畏文庫」・巻頭に「濱松藏書」の朱印。

奥書「右以三頭中将實連朝臣平少納言時名朝臣等之／本今校合畢／寛延二年十一月十二日

從三位右中将藤原（花押）」（巻一）・「右以三頭中将實連平少納言時名等／朝臣本今校合了／固本故殿今點始之本也／寛延二十
二 十 藤原朝臣（花押）」（巻二）・「右以三時名朝臣之本今校合了／固本故殿今校合始之書也今度／今再校了」（巻五）、また巻
七に「三条家本／平松家本／滋野井家／三家校本／滋野井公麗卿御手沢校本／大和栄山寺本也」の紙片が貼付されている。本書
は箱入り（蓋無し）で、箱の横に「和第拾號 改濟（朱）」とある。

(九) 『古今餘材抄』 貴IV—二十四

釋契沖著。題簽「古今餘材抄」（但し巻六落箔） 十一巻十一冊本。一面十行書き。二十六・七×十八・八糎。巻頭に「龍膽書
屋」の朱印。題簽に「丙之貳番」の朱印、また巻一の題簽のみ「新宮城書藏」（双廓）の朱印。

巻末識語「古今餘材抄十巻先年撰之雖然草稿汚穢自猶不得讀由此詔老兄去年寫彼草稿畢、日月荏苒校訂延而及今、愚案之
中、若有二兩義之可取庶補童蒙牟、元禄五年仲秋廿五日／密門釋契沖記之／再記仮名依日本紀・萬葉集・和名鈔等後人莫
恠之」。本書は巻一が「真名序・餘材抄の序・仮名序」の順になっている。また夥しい頭注（「打聞」・「遠鏡」等）や付箋（「冠
辞考」等）を有す。箱入り（蓋無し）

(十) 『御當座歌集』 IV—三七六九

内題なし。題簽「御當座歌集」一冊(三十四丁、但し二十九丁分のみ使用)。一面和歌五十六首。二十七・七十九・一糧。
本書は水野忠精・村田春〇等によって詠まれた歌を集めた歌集。次の人名がみられる。(人名の後は、本書所収の和歌の数)「広風(二十五首)・勝敬(十四首)・保佑(十九首)・貴重(四首)・彬(十四首)・孝順(二十四首)・允懷(十首)・春埜(二十五首)・忠精(二十五首)・勝從(七首)・実平(二十首)・之美(十八首)・昌新(十六首)・春賀子(七首)・康直(八首)・宗秀(三首)」これらの人名は「都立大」の「学芸史料」中にも散見する。

(十一) 『語例』 八一五・五一十四

内題なし。表紙に「語例」と打付書。一冊(四十七丁、但し大半は未使用)。二十二・八十六糧。

本書は後出(三十)の増補部分の筆者と同一筆者の手のものと思われ、古典から種々の語の用例を抜き出したメモ書きである。「都立大」の「学芸史料」中にもものがある。

(十二) 『今昔物語』 九一三・三七—八

源隆国著。目次巻頭「今昔物語集」題簽「今昔物語」。全二十九冊(巻八・十八・二十一・三十三・三十一を欠き、巻十一・二十四・二十六を分冊)。一面九行書き(または八行・十一行書き)。全冊二十九・四×二十・九糧。

本書は江戸時代後期の写本で、蔵書印はないものの、古本系の良写本である。なお巻十一上・下、二十四上・下、三十と他の巻とは料紙の質に違いがある。また本書は『日本古典文学大系』本の校合の一本に使用されている。なお『大系本』の解説や『図説日本の古典』(集英社刊)の写真版の解説に、本書を「新宮城の旧蔵本」としているが、ここに訂正しておく。⁽¹⁴⁾

*『日本古典文学大系二十四』(岩波書店昭和三十六年刊)参照

(十三) 『山家集 異本』 貴II—八

釋西行著。内題「山家集」。表紙に「山家集異本」と打付書。表紙に「朝田所蔵」の朱印。扉に「蔵目録」の朱印。一冊（四十丁）。一面十一行書き。二十四・四十八・三。総歌数六百首、若干の重複が見られる。

奥書「此集周嗣禪師不慮被相傳西行上人自筆處於法勝寺僧房焼失間尋他本書寫之けふりたに跡なきうらのもしほ草又かきおくをあはれとそみる 頓阿此西行上人集蔡花園上人此本卷始和哥副一首新所被灑翰墨也雖未消遺恨之心灰聊擬殘芳之手沢而已／觀應二年七月日修行者周嗣判」。本書の書写年代は室町時代末期頃と言われている。

*「西行上人集伝本考」（寺澤行忠）（『慶應義塾大学経済学部日吉論文集三五』）

「山家集諸本の研究（一）」（高城功夫）（『東洋大学大学院紀要七』）参照

（十四）『散木奇歌集付散木集注』 IV—三七七〇

源俊賴著。釋顯昭注。内題「散木奇歌集」（上巻のみ「散木奇歌集」）。表紙に「散木集」と打付書。十卷三冊。二十三・五×十六・二。糹。

書入「朱校契冲手写本也分爲三本此本下卷／私補入顯昭注九十七首四張契冲本／一首一行書」（卷一卷頭朱）「自是以下依無他本所書写以元本校合更得異本可再校也」（卷九卷頭青）。奥書「右散木棄歌集三卷詵讚岐守義／令新写校合畢朱如元本青私所書加也／干時安永八巳亥年正月十日 蘆庵」。これによれば本書は、元来の八卷本を上・中二冊に写し、欠巻部分を他の本で補い、更に顯昭の注を加えたものを下巻とし、それに蘆庵が書入したものである。なお、『国書総目録』によれば「関西大学蔵本」として「安永八年小沢蘆庵写」の本があるが、『関西大学所蔵岩崎美隆文庫・五弓雪窓文庫目録』によれば、岩崎美隆の旧蔵書に「安永八年小沢蘆庵写本の写本」がある。この本が『国書総目録』に記されているものである。

*関根慶子著『中古私家集の研究』（笠間書院 昭和四十二年刊）参照。

（十五）『紫家七論』 III—八五三

安藤為章著。内題「七論」。表紙に「紫家七論」と打付書。一冊（五十二丁）。一面九行書き。二十六・九×二十・四糎。巻頭に「三畏齋水野蔵」の朱印。

奥書「此書安永二辰の年中秋写し之もの也／源保之」。「源氏系図」を巻頭に付す。

（十六）『七事秘書』 七九一・七一六

内題なし。題簽「七事秘書」。一冊（七十九丁）。十七×二十四・三糎。

識語「右七事之書今／熟読候處、相違無之者／也／文化五辰年／閏六月十日／蓮意庵宗思」

（十七）『諸帳面』 VI—二二二六

本書は「水野本」の中で唯一の水野藩（浜松藩）藩政史料である。内容は、『諸帳面総目録』と表紙に打付書したもの一冊。『戸律断例裁旨』と表紙に打付書したもの三十四冊。『農商條諭』と表紙に打付書したもの四十一冊の全七十六冊である。『総目録』によれば本史料は、天保三年～十四年までの浜松藩郡奉行の伺書類を写したものである。（但し、天保十一年以降は追加されたもので、近江等の飛地のものも含まれている。）

現在、本史料についての解説・分析等は未着手なので、詳細は後日にゆずるが、一・二紹介しておく。遠江地方の盆行事として知られている『遠州大念仏』に関する史料が、『戸律断例裁旨十一』にある。それによると、度々の禁令にも係わらず、「豊作祈願」等の名目で、「大念仏に紛らわしき儀」を行うことがあった様である。⁽¹⁵⁾ また他の史料には、浜松藩の儉約政策・農業政策等に関するものもある。⁽¹⁶⁾

浜松藩関係の史料は、浜松藩自体藩主の移動が激しかったただけに、地元に纏まった史料が少なく、「都立大」「国会図書館」・「京都大」など各地の図書館に分散して所蔵されている。本史料もその一例であると言える。

（但し、現在五冊所在不明である。）

(十八) 『後編諸家大系図(小笠原家)』 所在不明。

(十九) 『職原抄』 三三三・一—Ki六一—五

北畠親房著。内題・題簽「職原抄」。二卷四冊。一面十二行書き。二六・八×十九糎。表紙・卷頭に「新宮城書藏」(単廓)の朱印。また第四冊目に「百六枚 磯村富助」の紙片が差し込まれている。また朱筆の書入れが若干ある。「春野云」とあり、村田春野の書入本である。

(二十) 『續日本紀考證』 III—八三五

村尾元融著。

現在所在不明。(図書原簿・カード目録によれば、卷一—三及び卷五—八を所蔵)

(二十一) 『新古今和歌集抄録』 IV—三七七二

内題・題簽「新古今集」。一冊(二十五丁) 一面和歌四首。二二・二×十五・九糎。

本書は「新古今和歌集」中の和歌の抄録。抄録和歌数二百首。前出(三)と同様「都立大」の「学芸史料」に同種のもが見られる。

(二十二) 『饌羞類考』 貴IV—十三

高橋親宗著。内題・題簽共「饌羞類考」。扉「大秘不_レ許他見」 饌羞類考」。三卷一冊(百五十丁)。二六・五×十九・二糎。奥書「右饌羞類考三卷自_二滋野井殿_一拝_レ借之_二密ニ_一書寫畢、実可_レシ為_二食官之規矩_一者也_レ内膳奉膳兼志摩守高橋等庭」・「右雖_二等庭朝臣秘本_一以_二予家_一累世為_二饌調職_一被_レ許借_二可_レ謂_二芳志子孫不_レ出_二庫外_一可_レ秘藏者也_レ文化八月三月_一吉田社公文所藤

原以文」。これによれば、本書は山田以文の書写本である。欄外に「以文考」との以文の書入があり、また若干であるが、「春云」の朱筆の村田春門の書入がある。

(二十三) 『太平武鑑』 二八一・〇三五―八

題簽「太平武鑑」一冊(百十二丁)。十二・八×十八・六糎。

扉に「元禄五壬申年／太平武鑑／江戸日本橋南一丁目／書肆寸原」。また朱筆で「文化三丙寅年迄百五十年」とある。

(二十四) 『天然人為用格』 八一五・四―〇二八一

大畑春国著。内題・題簽共「天然人為用格」。一冊(十五丁)。二十六×十六・七糎。

(二十五) 『東遷基業』 III―八四五

佐久間高常(健)著。内題・題簽共「東遷基業」。三十卷三十冊各面ほぼ十二行書き、引用部分は細字二行書き。二十六×十七・五糎。

奥書「享保十八年己秋八月、東野散人獨立齋健／把筆ヲ於築波山陰之敝廬」。また「享保十七年壬子春」の高常の序がある。本書は『国書総目録』に未掲載。著者の自筆本か。

(二十六) 『南方紀傳』 III―八四六

内題「南方紀傳」(上巻のみ「南朝紀傳」。表紙に「南方紀傳」と打付書。七卷三冊(卷二欠)。一面十二行書き。二十七・九×二十・三糎。巻頭に「考信閣文庫」・「平氏文庫」等の朱印。また上巻に「難波宗建卿御所持本／外題御直筆本三冊」の付箋が挿入されている。なお「巻二」は書写原本に既に欠けていたものである。

(二十七) 『日本紀略』 二二〇・三八一六

内題「日本紀略」。表紙に「日本紀略」と打付書。全三冊。一面十一行書き。二十七・三×十八・八厘。

本書は「醍醐天皇・朱雀天皇・村上天皇・冷泉天皇・圓融天皇」の部を有し、「金沢文庫本・異本・尾州本・仁和本（朱筆）」と校合し、その後「塙本・狩谷掖齋本（青筆）」で校合したものである。また、第一冊目の表紙裏に、次ぎの識語を有す。「日本紀略原本散逸今所現行者始于文武天皇元年終于後一條天皇中間宇多天皇闕其餘歷代之間所遺脱者不一而足実可恨矣然今讀之光孝天皇以上悉皆所抄錄六國史中日本後紀既逸而紀略幸載其文是實雖一大幸事而近世缺冊既行于世且鴨枯之脩逸史既蒐輯其文無一掛漏間亦紀略之與國史有文字異同余既批校之所藏本史則光孝以上雖闕之可也故今比校諸本正其顯誤新寫醍醐天皇以下至後一條院九代得六卷文字異同逐一參訂注字傍以來或駢色分別其所傳本猶且待異日得他本反復校讐遂以為善本云／文政八乙酉年八月伴信友」

(二十八) 『三河後風土記』 III 一八四七

内題・題簽共「三河後風土記」。四十五卷五十八冊（卷七、十欠）。一面九行書き。二十三・三×十六・五厘。全文フリ仮名付き。

(二十九) 『名目抄』

藤原實熙著。所在不明。

(三十) 『類聚名物考』 〇三一・二一Y四二一三

山岡浚明著。扉「類聚名物考」。表紙に各々「名物考船車」・「名物考調度」・「名物考言語増補」と打付書。全十六冊。二十三・

二×十六・三糶。巻頭に「三畏齋水野蔵」の朱印。

本書は「船車部」(一―三)・「調度部」(一―九、十五―十九)・「言語部」(一―三、五―十一)が存する。特に「言語部」は各語の後に各々「増補」が加えられている。「増補」の数は各々次のとおりである。

「あ」(百八十五語)・「い」(百十一語)・「う」(八十一語)・「え」(八語)・「お」(十九語)・「か」(百八十七語)・「き」(三十一語)・「く」(七十九語)・「し」(百十八語)・「す」(七十六語)・「せ」(二十七語)・「そ」(四十六語)・「た」(百六語)・「ち」(二十一語)・「つ」(五十五語)・「て」(二十六語)・「と」(七十八語)・「な」(七十六語)・「に」(十六語)・「ぬ」(十七語)・「ね」(十七語)・「の」(十七語)・「は」(九十五語)・「ひ」(百六語)・「ふ」(六十七語)・「へ」(四語)・「ほ」(二十八語)・「ま」(六十八語)・「み」(七十四語)・「む」(四十一語)・「め」(十四語)・「も」(四十語)・「や」(四十一語)・「ゆ」(三十語)・「よ」(四十語)・「ら」(五語)・「り」(五語)・「る」(一語)・「れ」(三語)・「ろ」(五語)・「わ」(三十一語)・「ゐ」(六語)・「ゑ」(一語)・「を」(六十八語)。

なお「けゝさ」の部は「都立大」にある。また増補に使用された資料は、「宇津保物語・堤中納言物語・和泉式部集・為忠百首・家長日記・内大臣家歌合・出観集・赤染衛門集・釋日本紀」等である。前述のようにこの「増補」と『語例』(十一)の筆者は同一人物と思われる。

(三十二) 『歴史徴』 III―八四二

松崎祐之著。内題・題簽共「歴史徴」。全三十三冊(巻十六―巻三十九。但し、巻二十五は二冊・巻二十七は三冊・巻三十三・三十四は四冊に分冊)。一面九―十二行書き。二十七×十九・六糶。巻頭に「雑史 引馬文庫」の朱印。巻十六の始めに松平信彰の序・中寫魚潜夫の凡例及び次ぎの識語を有す。

「史徴刻纔成ニ其序凡例ニ、如レ右本編紀年始ニ于ノ神武天皇元年ニ終ニ于後奈良院天皇天文十一年ノ冬十二月壬寅東照宮生ニ謹聞ニ其體製ニノ神武天皇至ニ光孝天皇ニ專據ニ國史ニ所ニ旁引ニ諸書ノ無レ幾焉豈得レ非ニ以下國史既典實而猶古殘簡鈔ニ別可レレ徴之故ニ哉、予

方_レ騰_二寫之_一、苦_二其全部重大而筆力不_レ給也、於_レ是自_二神武天皇至_二光孝天皇_一若于卷不_二復騰_一／寫_二焉、特拔_二其旁引諸書_一、批_二入之所藏国史_一、以為_二省_レ力／之計_一矣、但騰既起_二筆於國史之所_一無、則宣_レ始_二于_二宇多天皇_一、而始_二于陽成天皇_一者不_レ可_レ乱_二本書成卷_一、／故爾／文政八乙酉三月 課人騰寫完成書／伴信友」。

また卷二十七・下の巻末に「享保十八年癸巳十一月四日蒙_二／尊命_一校考修飾新寫焉、已十歲未_レ終／全功_一、是歲寛保二壬戌五月二日復／命先上之舊本四十七冊之内、右三十／三冊今潤色之／上、時十一月七日五碎奥平廣業謹識」とある。

(三十二) 『和州小泉敵討親子憤』 X―四〇二

内題・題簽共「和州小泉敵討親子憤」。二卷一冊(二十二丁)。二十三・三×十六・三纏。後半部分「三・四・五」が「都立大」にある。

(三十三) 『和名類聚抄考證』

藤原實熙著。所在不明。

六 おわりに

本稿では、「水野本」の概略と写本についてのみの略述に終始して、個々の図書の中身については殆ど触れられなかった。これは全て筆者の準備不足でしかない。今後、寄贈経緯や「都立大」資料との関係など調査・検討して後日また報告したい。⁽¹⁷⁾

なお最後に本調査において、「水野本」の中には水野家伝来以外の他所より将来された本が多く見られたことを付け加えておく。

(付) 図版の撮影は本学写真室大島氏による。

注

- (一) 『國學院大學八十五年史』(國學院大學 昭和四十五年刊) 五百七十一頁
- (二) 他に「岩崎春彦文庫(元本学教授岩崎春彦氏の旧蔵書)」・「畠山健記念文庫(波多野完治・勤子夫妻の寄贈書)」・「八代國治旧蔵本」(元本学教授八代國治氏の旧蔵書類)などがある。また近年次ぎの本学元教授の記念文庫の整理が終了した。
- 今泉文庫(元教授今泉忠義氏の旧蔵書)・岸本文庫(元教授岸本誠二郎氏の旧蔵書)・樂石文庫(元教授大場磐雄氏の旧蔵書)・山田文庫(元教授山田統氏の旧蔵書)・松岡文庫(元教授松岡熊三郎氏の旧蔵書)・峯村文庫(元教授峯村光郎氏の旧蔵書)
- (三) 他にも表紙裏に「献本五十部の内」と書かれた松木時彦氏の寄贈書・横田權助氏・多田寅松氏等々の寄贈図書がある。なお加藤孝太郎氏の蔵書は、本学以外にも埼玉県立浦和図書館に「晚霞文庫」の名で収蔵されている。また未整理図書の内には藤岡好春氏寄贈の「堀秀成塾」旧蔵書がある。(河野省三著『國學史の研究』畝傍書房 昭和十八年刊 三百五十五頁。参照)
- (四) 『國學院雜誌』大正十五年五月号の雜報欄に寄贈された図書の全書目が掲載されている。また『國學院大學學報』の「稀觀書シリーズ十五」に「水野文庫」として紹介されている。
- (五) 寄贈経緯には直接関係しないが、昭和六年、小山正博士(遠江国学の研究者)が水野家を訪問した時、史料編纂所の高柳光寿氏(院友)の紹介状があったという。『水野忠邦国学の師高林方朗』高林方朗顕彰会 昭和三十八年刊 百四頁)また、当時の水野家の蔵の様子にも触れられている。(同書)
- (六) 他に国立国会図書館・東京大学にも数点ずつ収蔵されている。
- (七) 『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』七十頁
- (八) 例えば、北島正元氏「水野藩の藩政改革」(『日本歴史 百号』)
- (九) 簞笥の蓋に書かれている書目は次のとおりである。「春門自注源氏物語／山家集異本／歌仙歌集／和名類聚抄考證／蜻蛉日記／嚶々筆記／古今和歌六帖標注／土佐日記創見／古史微／新撰字鏡／拾芥抄／枕草子春曙抄／宇津保物語／名目抄／續日本紀考證／紫家七論／神代卷髻華山蔭／萬葉用字格／玉勝間／源氏物語玉乃小櫛／董艸／古事記／祝詞考／詞通路／大祓詞後々釋／山口葉／神代紀葦牙／答問錄／紫式部日記傍註／伊勢物語新釋／字音假名遣／佐喜草／雅言集覽／江家次第／令義解／職原抄／公事根源／日本書紀／日本紀略／宇治拾遺物語／古今著聞集／詞の玉緒／大和物語抄」
- (十) 『蔵書印集成』(平野喜久代 昭和四十九刊)
- (十一) 山本嘉將著『加納諸平の研究』(初音書房 昭和三十六年刊) 百四十頁
- (十二) 『渡辺刀水集三』(『日本書誌学大系四十七(三)』青裳堂書店 昭和六十二年刊) 四百三十一頁

(十三) 前掲書 四百七頁

(十四) 本学「国語国文学会」の展示会目録にも指摘がある。

(十五) 大念仏の隆盛について、「農民騒動の一種」・「反体制運動」と捉える考えがある。(三浦俊明著「浜松藩」「新編物語藩史五」新人物往来社 昭和五十年刊)

(十六) 本史料を利用したものに、関口博巨氏「浜松・水野藩の「勸農」仕法について」(『太平臺史窓四』)がある。

(十七) 「都立大」所蔵の写本類について若干触れると、村田春門書写『河海抄』・『花鳥余情』(『目録』の村田春海写は誤か)(印記「物語 引馬文庫」・「不忍文庫」印のある『古今要覧稿』(三冊)等が見られる。また『目録』の「蔵書」の項以外の項目に分類されているもののなかに図書として扱われていたものもある。

参考文献(注に記したものを除く)

・『浜松市史』(二)(浜松市 昭和四十六年刊)

・北島正元校訂『丕揚録・公德辨・藩秘録』(『日本史料選書七』近藤出版社 昭和四十六年刊)

・渡辺守邦、島原泰雄編『蔵書印提要』(『日本書誌学大系四十四』青裳堂書店 昭和 六十年刊)

・西村宗一、笹淵友一校『校本うつほ物語 俊蔭卷』(興文社 昭和十五年刊)

・『改訂増補内閣文庫蔵書印譜』(国立公文書館 昭和五十六年刊)

・『東京都立大学付属図書館所蔵水野家文書目録』(東京都立大学附属図書館事務室 昭和四十九年刊)

・北島正元著『水野忠邦』(『人物叢書』吉川弘文館 昭和四十四年刊)

(國學院大學図書館司書)